

原点回帰

1.

夜更けに小さな明かり一つを点した部屋の中で、白山は一点をじつと見つめていた。

座卓の上に置かれているのは、先日あさまから送られてきた手紙だ。かれこれ十四年もの間、殆ど交流が無かった所へ現れたそれは、白山を再び鉄道の道へと誘おうとしている。

懐かしいかと言われれば首を縦に振るだろう。だが、未練があるかと問われれば、首を横に振る。あの時白山は、唯一無二の友と共に引退することが出来たし、長年思い続けて手に入れた恋人は既に引退していたから、その役目を去ることに少しのためらいも無かった。

だが、風を切つて線路をなぞる感触を忘れたわけではない。目を閉じて思いを馳せれば、ついこの間の事のように思い出すことが出来る。四季折々で変わる空氣の匂いやその温度、峠の木々が花を咲かせ、葉を茂らせ、そしてその葉を色づかせて落とし、白い雪に覆われる様子。特急として走ってきた二十五年もの間に

感じたこと、見たことは全て覚えている。

白山は未だ返事を書けずにいた。既に何度も読み返した所為で、すっかり覚えてしまった手紙の文面を思い浮かべながら、今日こそはと便せんを用意してみたものの、ペンを持つ指が動かない。

「……駄目だ」

からん、と手からペンが離れて座卓の上に落ちた。それはころころと転がって、便せんに一筋の線を引いていく。ああ、また一枚駄目にしたと思いながら、白山はそのペンに手を伸ばすと、キャップをしてしまった。

返事を書けない理由は分かっている。白山の中で、まだはつきりと答えを出せていないからだ。過去に特急として走っていた者が、再び列車として、しかも今度は新幹線として走らないかと誘われて、断る者はいないだろう。それくらい名誉な事だというのに、白山が答えを出せない理由はただ一つ、新幹線となる代償に、この生活を捨てる必要があるからだ。

引退後、ようやく探し当てたはくたかとの慎ましい生活に白山は満足していたし、これから先もこの穏やかな生活がずっと続くものだと思っていた。愛する人と、周りの目を気にすることなく、堂々と一緒に過ご

することが出来る。特急時代には考えられなかった事だ。

新幹線になれば、再び会社の寮に入ることになるだろうし、一般人となつてしまつたはくたかと会うこともそう簡単にはできなくなつてしまう。はくたかが引退してから白山が引退するまでの十五年間を耐え続けた白山にとつて、またあの生活に戻る事を考えるだけで辛くて胸を掻きむしりたくなる。それに、一度新幹線になれば、引退して帰宅することなど当分出来ないだろうし、離れて暮らしている間にはくたかに万が一の事があつたらと思うと、耐えられない。

だが、心の奥には、再び線路の上を走る事を渴望している自分がある。もう一度、今度はあの時よりも速く、大勢の乗客を乗せて山を、谷を、トンネルを、橋の上を駆け抜ける事が出来るようになるのだ。時速二百キロを超える、在来線では体感することが出来ないスピードで走る事を考えると、ぞくりと背筋が震える。自分はどうしたいのか。自分自身の気持ちが一番分らない。

白山は長いため息を一つ吐き出すと、座卓の上に置いていた手紙と便せんを手に取り、その場から立ち上がった。そして、自分用の棚の一番奥にそれらを隠す。はくたかにはまだ知られたくなかつた。

隣の部屋ではくたかが眠っている。少しだけ開けておいた襖の間から、微かに寝息が聞こえてきていた。目を覚まさないうちに布団に潜り込もうと、明かりを消し、真つ暗になつた部屋の中をそつと移動する。物音を立てないようにゆつくり襖を開け閉めして、白山用に敷かれた布団へ潜り込んだ。どきどきと少し速くなつた鼓動を落ち着けようと、深い呼吸を繰り返す。

枕に乗つたはくたかの顔は、窓から差し込む月明かりの所為で少し青白く見えた。思わず呼吸を確かめようと手を伸ばしたその時、くるとはくたかが寝返りを打つて白山の方に顔を向けた。

白山より年上なのに、どことなく幼く見える表情のはくたかの寝顔が白山は好きだつた。伸ばした手を引つ込めた白山は、暫くの間、はくたかの寝顔を眺めていた。

「少し、出かけてこようと思うんですけど」

はくたかから朝食が乗せられた皿を受け取つた白山は、そう切り出した。はくたかは続けて茶碗にご飯を盛りつけながら、そう、とだけ返事をする。

原点回帰

「二、三日帰ってこないかもしれません」

「うん、分かった。気をつけてね」

「……どこへ行くのかとか、訊かないんですか」

白山の声に不満が滲んでいる。はい、と茶碗を手渡ししながら、はくたかは首をかしげた。

「訊いて欲しかったの？」

「いえ、心配じゃ無いのかと思っただけです」

いただきます、と手を合わせて二人で朝食を食べ始めた。朝の空気が少しずつ冷たくなってきた、いずれストーブを出さなければならなくなる。はくたかが朝食を作ってくれている間に部屋を暖めるのは白山の仕事だった。

「白山、私は君をここに縛り付けておくつもりはないよ。私の事は気にせず、君はやりたいことをやったらいい。行きたい場所があるのに、君をここに引き留めておく権利なんか私には無いんだから」

「先輩ってば、まだそんなこと言ってるんですか。ここには僕の意思でいるんですから、別に縛られてるとかそういうんじゃない」

「いや、だから、出かけるのだから自由にして良いよって事なんだけど……」

少し語気が強くなった白山の言葉に、はくたかは思

わず肩をすくめた。あ、とようやく話の意図を理解したらしい白山は、わかりましたと言って暫く食事に集中していた。

静かな朝食の時間。聞こえるのは箸と食器が触れ合う音と、窓の外で鳴く鳥の囀りだけだ。

「ごちそうさまでした」

食べ始める前と同様に手を合わせて食事を終えた白山は、空になった食器を流しへ運ぶのはくたかの背中に向かって声を掛けた。

「群馬まで行ってきます」

「群馬？」

「ええ。旧い知り合いに会いに」

「分かった。ゆつくりしてきたらいいよ。私の事は気にしなくていいから」

「数日で帰ってきます。必ず」

「分かってるよ。ここで待っているから」

はくたかに待っていると言われて、白山はようやく安堵の表情を見せた。あまりにあつざりとしてきて良いよなんて言われたから、少し不安になっていたのだ。

それを見たのはくたかも、良かったと胸をなで下ろす。自分が言ったことは間違っていないかった。白山は時々

こうしてはくたかを試すような事を言う。無意識の行動なのかもしれないが、間違つたことを言うとしても悲しそうな顔をするので、なるべくならば正解を与えてあげたいと思つていた。白山を悲しませることは本意ではない。

はくたかが食器を洗っている間に、準備を整えたらしい白山が背後に立つた。そして、そのまま抱きしめられる。

「泡がついてしまうよ」

「行ってきます、先輩」

「うん、行つてらっしゃい」

再度気をつけて、と声を掛けると、白山は笑つて、分かりましたと頷いた。それからすぐに玄関の扉が開け閉めされる音が聞こえた。見送りに出るべきだったかと思つたが、数日の外出にそれは大げさだろうと思ひ直して、はくたかは洗い物を片付けることに集中することにした。

2.

ホームに降り立つと、どことなく懐かしい雰囲気包まれた。大勢の乗客に混ざって、改札のある階へと移動する。

電車を乗り継いでやって来た高崎駅の構内は綺麗に改装されており、見知らぬテナントがいくつも入っていた。土産物や特産物が並ぶコーナーや、ショーケースの中に色とりどりの洋菓子が並ぶ所など、見ていて飽きない。普段の生活ではあまりこういったものに接する機会が無いこともあって、どことなくわくわくとした気分になせられる。

だが、これから向かう場所はそんな気分を連れて行くような場所では無い。改札横の券売機で横川までの切符を購入し、再び改札を通る。信越線と書かれた文字を見て、懐かしい気持ち胸をよぎった。と同時に、心の奥底に閉じ込めていた十五年前の記憶が少しずつ蘇り始める。

電光掲示板に表示されていたホームへ向かうと、そ

こには二両編成の電車が停車していた。平日の昼間の時間帯だからか、乗客はまばらでロングシートに座る人の間隔も広い。一旦空いていたシートに腰掛けた白山だったが、ふと思いついて運転席後ろに移動した。発車を告げるベルが鳴り響き、ドアが閉まった。電車の壁に背を預けた格好で、白山は運転席からの風景を眺める。高崎駅の周りはさすがに建物も増えて様相が異なっていたが、徐々に横川に近づくにつれて、記憶の中の景色と今見ている景色が重なっていく。

安中駅の傍にある工場や磯部駅の傍にある温泉街。以前は通り過ぎるだけだったそれらの駅を、一駅一駅確かめるようにして停車していく普通列車。地元の人が買い物を下げてホームへ降りていく様子を見ながら、今もなお信越線としてこの路線を頼ってくれている人がいる事が嬉しいと思った。

「次は終点、横川。横川です」

高崎から横川までは各駅停車に乗っても十分ほどだ。途中で乗ってくる人も殆どおらず、殆どの人は途中駅で降りてしまったので、横川駅まで乗ってきたのは片手で数えられるくらいの地元の人と、二両目の一番後方に陣取っていた数名のグループ、そして白山だけだった。地元の人々は黙って改札を抜けていき、グル

ープの人々はハイキングを楽しむに來たのだろう、わいわいと楽しそうに何か話している。暫くホームで話をしていた彼らも、そのうち改札を抜けていった。

人が去れば瞬く間にホームは静けさを取り戻す。あまりの変わりように少し寂しさを感じた。

特急が停車していた頃は、いや、この先がまだ続いていた頃と言った方が良いか。ともかくその頃はどの列車も必ずエフに押し上げてもうらうために必ず横川駅に停車したし、機関車との連結作業をしているわずかな時間に、大勢の乗客がホームに降りてその釜飯を買い求めている。それを分かっている弁当屋の売り子達の特急が来る頃合いを見計らってずらりとホームに並び、ドアが開くと同時に声を張り上げていたものだ。

けれど、今の横川駅には、その頃の面影は無い。改札横に掛かった「おぎのや」の看板と立ち食いそば屋だけが、当時の面影をわずかに残していた。

改札は自動改札になり、差し込んだ切符はあつさり食われてしまった。ぼんやりしている間にいよいよ駅前から人の姿が消えて、白山は一人、駅の前に立ち尽くした。

峠の方角から、風に乗って軽快な音楽が聞こえてくる。ひとまずそちらへ向かおうと目の前の道を歩き始

めた。

駅から先の線路は無情にもコンクリートによつて埋め立てられている。ただ、線路そのものは残されており、レールが入る位の溝も残されていたから、何かに使うこともあるのかもしれない。

軽井沢行きのバス乗り場を横目に通り過ぎ、植え込みの向こう側に見えてきたのは碓氷峠鉄道文化むらという施設だった。碓氷峠が廃止になってから暫くして、鉄道のテーマパークとして、横川機関区の跡地を改装したものだということは風の噂で聞いていたが、実際に足を運んだのは初めてだ。

入り口横の窓口で入場券を買った白山は、窓口横のゲートをくぐって園内に足を踏み入れた。目の前には見覚えの無い、開園時に作ったと思われるレンガ造りのアーチが見えたが、その奥には当時の検取庫と管理棟がそのままの形で残っていた。

休日には家族連れや鉄道ファンで賑わうであろうこの場所も、平日の真つ昼間では閑散としていた。広場に置かれた遊具も動く気配はなくじつとしていた。

まるで貸しきりのようだと思いながら、渡されたパンフレットの案内図に従って園内を廻ってみることにした。どうせ時間はたっぷりあるのだ。まずは検取庫

原点回帰

だった場所へと向かった。

周りにはあさまの車両やそれよりもっと古い車両たちが展示されていたが、何より白山を引きつけたのは、検収庫の中央に置かれたエフの機体だった。

E F 6 3 電気機関車。横川と軽井沢の間に立ちほかかる碓氷峠専用の機関車。ここを通る電車でこの機関車の世話にならなかったものはいない。白山も下り列車は後ろから押し上げてもらい、上り列車は前で支えてもらいながら、数え切れないほどの峠を通過したものだ。

横軽対応が施された白山の専用車両が実際に運転を開始するまで、白山とエフはここで何度も一緒に訓練をした。暑い夏の日も、大雪が降る中でも、数え切れないほど上り下りした事は今でも忘れられない事の一つだった。

機体に近づく、横に案内看板が設置されており、ここに置かれて既に長い時間が経っている事が見て取れた。そと側面の藍色に手を重ねて金属の冷たさを感じれば、忘れていた遠い日の間隔が揺さぶり起こされるような気がする。

機体の横には工具がきちんと並べて置かれていた。今でも使うことがあるのか、それとも展示用として置

かれているのかは白山には分からなかったが、ちらほらと懐かしい名前や単語が見て取れて、思わず頬が緩んだ。国鉄、という団体があつたことを知らない人も増えてきたが、ここにはまだその痕跡が残っている。ぐるりと機体を迂回するようにして反対側に出ると、

そこにはシミュレーターが設置されていた。あいにく誰も使っていないようで、覆いの中からは物音一つしなかった。ちよつとやってみたい気もしたが、今日は遊びに来たわけでは無い事を思い出し、我慢することにした。

検収庫の奥の扉の向こうはまた別の展示スペースだった。新しい建物が増築されていて、碓氷峠の歴史などがパネルで展示されている。白山やエフたちよりももっとずっと古くにこの碓氷峠を走っていたアプト式機関車の周りに、機関車用のヘッドマークが並べられているのが見えた。

「こんなのがあつたんだ……」

特急が付けていたものとは違う、円形のヘッドマーク。あさまや白山といった、碓氷峠の定期列車のものはもちろん、臨時列車のヘッドマークもきちんと並んでいる。

雪を被った山の前にクロユリがデザインされた自分

のヘッドマークをそつと撫でる。峠を登ったり下りたりが忙しかつたエフが実際にこれらのヘッドマークを付けて運転することは無かつたはずだ。けれど、他のヘッドマークに混ざつて自分の名前が刻まれたものがこうして展示されている事が、白山には嬉しかつた。

「あれ？」

横から一つずつ見ていって、最後のヘッドマークの前にたどり着いたとき、白山は思わず声を上げた。

そこにははくたかのヘッドマークが展示されていた。はくたかは上越線經由の特急だったから、碓氷峠を通ることは無かつたし、エフと共に走つたことも無かつたはずだ。そんなはくたかのヘッドマークが何故ここに、と驚き、駆けよつてまじまじと眺める。そして、そつと手を伸ばした。よく見れば、はくたかのヘッドマークは白山やあさまのそれとは違つて、厚みが無く、丸い金属に絵が描かれただけのものだった。だからなのか、このヘッドマーク展示スペースでも一番端に置かれている。

どうせなら隣に置いてくれたら良いのにと思わないでも無かつたが、一般人である白山が勝手に展示内容を変更する事は出来ない。何となく名残惜しい気持ちのまま、白山はその場を離れた。

壁に展示された説明用のパネルは、碓氷峠の過酷な歴史と共に、エフたち機関車の偉業を伝えていた。彼らがいなければ、白山やあさま、そして普通列車たち誰もがこの峠を無事に上り下りすることなど出来なかつた事を思うと、本当に彼らあつての自分たちだつたと思う。

一枚一枚じっくりと時間を掛けて見ていたからだろうか、気づかぬうちに数人の人が白山と同じように展示されているポスターを眺めていた。一通り見終わつた白山は、彼らの邪魔にならぬようにと白山は展示スペースから出る事にした。

建物の奥の扉は外に繋がつていて、コンクリートで出来た階段が、少し高いところにある屋外展示スペースへと続いていた。

階段を登ると、目の前に機関車がずらりと並んでいる様子が目に飛び込んできた。古今東西様々な機関車・電車や業務用車がこうして一堂に会している様は、圧巻の一言だ。

車両横に設置された説明書きを読みながら一つ一つ見て回れば時間が経つのはあつという間だった。特急時代は自分の車両以外に接することは殆ど無かつたし、引退後は鉄道という存在自体に関わらないように生き